
キミは未だ夢の中。

桃乃花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キミは未だ夢の中。

【Nコード】

N2137H

【作者名】

桃乃花

【あらすじ】

藍染たちの裏切り、未知の氷輪丸の姿。 死神たちに、平和な

未来は或るのか？日番谷中心、ファンタジーシリアス長編！！

1の夢。ウラギラレタノ？

如何して？

如何して貴方はあたしを裏切ったの？

あたしに、何が足りなかったの??

ずっと、貴方の隣で戦える、と思っていたのに。

貴方の傍にいたい。

ずっと。永遠に、貴方の傍で笑っていたい。

その願いは、叶わないの …??

…

「 あいぜん、たい、ちよう…? 」

胸を赤く染め上げる液体が、ぼた、と床に零れ落ちた。 啞然とした

表情で見上げる少女に、男は不気味に笑いながら言った。

「 さよつなら、雛森くん 」

どくん。

「 ……う、そ… 」

裏切られた。うらぎられた。

アタシ、ウラギラレタノ??

ぽたり、と。

今度は、塩気の無い涙は零れ落ちた。それは透明で、しかし濁っていた。

「 ……あ、 」

どさり、と床に倒れた雛森が、最期に発した言葉は、そんな母音だった。

“ 藍染隊長 ”。尊敬して、憧れて、敬愛してやまない上司。ずっと信頼していた。こんな日々が、ずっと続くんだ、って思っていた。

でも、そんなの所詮は理想で、夢で。

仮初の平穩は、あまりに脆く、儂く、簡単に崩れ落ちていった。

その後に残るモノは、絶望か否か。

…

「 雛森っ…！」

歯をぎりっと噛み締めて、日番谷は只管走つた。ひたすら

雛森が危ない。

それは何故か分かっていた。

日番谷は、雛森の微かな靈圧を追っていた。
今にも消えてしまいそうな、弱よわしい靈圧。

「 ひなもり…！」

大事なヒト。

絶対に護らなければならぬヒト。

この胸に。

この拳に。

そう、誓ったヒトだから。

2の夢。弱く見える。

ダンッ

地面を踏みつける足音が、ふとすぐ傍で止まった。

ちら、と振り返るとそこには、輝く銀髪を揺らし、綺麗な翡翠色の瞳がまっすぐこちらを見つめていた。

否、目は見開かれていた。

「 あい、ぜん…！？お前、なんで… 」

駆け付けた日番谷は、死んだはずの藍染を目に映し、驚きを隠せない表情をした。

「 やあ日番谷くん、久しぶりだね 」

「 お前、死んだはずじゃ…！？ 」

藍染は死んだはず。なのにこの場に居る。呼吸をしている。体を動かしている。

何故？

分からない。

焦る日番谷を見て、隣で市丸が不気味に笑う。

その時、日番谷の顔がはっと歪んだ。

「 雛森は…雛森は何処だ！？ 」

藍染はその言葉にふっと笑う。

「 何処だと思っ？ 」

不気味に笑う藍染に、日番谷は更に目を見開いた。

刹那、日番谷は瞬歩で消えていた。

たんつと降り立った音が、小さく響いた。
目の前に映るのは、真っ赤に染まった液体の雫。
そして、その場に倒れている、少女　雛森の姿が在った。

「ひな、もり…」

日番谷は啞然とした顔で雛森を見下ろしていた。
雛森の漆黒の瞳には、微かに涙は浮かんでいた。

「やあ、見つかってしまったね。キミには見せたくなかったんだが」
背後で、藍染がそう言った。

何故??

「お前、が…やったのか…?」

日番谷は藍染の方へと振り返り、途切れ途切れに問うた。
すると藍染はにやりと不気味に笑い、答えた。

「ああ、そうだよ」

突如、その場の空気が歪んだ。

ピキピキ…と部屋を氷が浸食していく。

その場の気温が、一気に下がった。

吐く息は真っ白く、手が悴んでいた。

「…藍染、てめえ…何故…!?!」

日番谷の瞳は、いつもの綺麗な翡翠色の輝きを放っていないかった。
その瞳は怒りに燃え、しかし冷酷な程に冷めていた。

「…藍染、てめえだけは殺す…!」

日番谷は背中に担いでいた氷輪丸をぐっと握り締め、鞘から抜き取った。

「あまり強い言葉を口にするな……弱く見えるぞ」
藍染は日番谷にそう言って、くす、と笑った。

3の夢。銀氷

じわり。

肩が、焼けつくように熱い。

何故だ？

確かにこの剣は、確かにこの刃は、あの体を貫いたはずなのに。

ぼた、と赤い液体が滴り落ちた。

「…嗚呼、所詮キミはこの程度だ」

藍染の剣が、自分の肩を貫いていた。

どさ、と体を支えきれなくなり、地面へと崩れ落ちた。

どくん、どくん…。

心臓が高鳴る。

この心臓も、遂に役目を終わらせるのか？

自分は、死ぬのか…？

チリン…

『冬獅郎』

心の何処かで、誰かが自分を呼んだ。

「誰、だ」

そう呟き問いかけると、また声が出た。

『 汝、我を持っておいてこの程度か。まだ汝の役目は終わっておらぬぞ』

「ひょう、りん…まる…？」

『 否、我が名は銀氷。氷輪丸の中に眠る、もう一匹の竜だ。汝はまだ死なない。否、死ぬぬのだ冬獅郎』

「如何いう、ことだ…」

「天廷空羅で、皆に知らせる。藍染惣右介が謀反を犯した。直ちに捕縛せよ、と。そして、汝は藍染を倒せ…までとは言わぬが、足止めしろ。」

「…俺にそんな力は、残っていない。」

「否、汝なら出来るはずだ。何故なら、我の主なのだからな。」

氷輪丸、否、銀氷は静かにそう告げ、日番谷に言った。途端、日番谷の体に変化が起こった。

藍染に肩を貫かれ、倒れて動けないはずの日番谷の体が、ぐらつと揺れながら立ち上がったのだ。傷は、氷によって止血されていた。これには、藍染も少し驚いた顔をした。

「何故、動けるんだ？」

しかし、藍染の問いに日番谷は応えない。否、応えることが出来ないのだ。

「藍染はん…これは、どないゆうことでしょうか。」

市丸も普段極細い瞳を少し大きめに開けて日番谷を見ていた。

日番谷は、ぐらり、ぐらりと危なっかしい足取りで藍染の方へと歩み寄ってくる。

するといきなり途中で止まり、ぱつと右腕を横に差しだした。

「天廷空羅。」

見る間に腕に黒い線が描かれ、全隊長格へと声が繋がった。

「全隊長格に告ぐ。藍染惣右介が生きていた。そして、謀反を犯した。現在、中央四十六室に居る。直ちに捕縛せよ。」

日番谷のとは思えぬ口調で淡々と喋る。藍染は僅かに眉を顰めて、日番谷を見ていた。

「…どういうことだい、日番谷くん。キミはもう動けないはずだが。」

再びそう問いかけるが、やはり日番谷の応えは無言だった。

「 … まあ良い。所詮死にぞこないだろう。直ぐにまだ地に伏せるが良い。」

藍染の刀が、再び鞘から抜き出された。日番谷はそれに反応し、斬魂刀を構えた。

「 次こそ、あの謀反者に負けるでないぞ。汝は1人では無い。我がついて居る。」

日番谷は氷輪丸のその言葉を、目を閉じて静かに聞いた。

そして、日番谷は斬魂刀を頭上に掲げ、何かを唱え始めた。

「 我は汝、汝は我。」

罪深き死者よ、甦ってはならぬ。

心悪しき死者よ、甦ってはならぬ。

今この時、我が汝を裁こう。

氷輪の月、第一章

銀氷

刹那、キラリと斬魂刀の先端が光り輝いた。

4の夢。倒したい。

なあ、氷輪丸。

お前は一生、俺についてくるか？

汝が望むのならば、何処までも。

ピキ、と音を立てて、斬魂刀が凍り始めた。

「我、汝と共に在りにけり」

日番谷がそう言った瞬間、斬魂刀の先端から巨大な氷の竜が創られた。

それはいつもの氷輪丸の巨大さ以上に大きな竜で、竜の一突きで四十六室は一気に崩壊した。

ゴゴゴゴゴト...

物凄い轟音が響き渡り、四十六室が崩壊したことによって、処刑台にいた隊長格たちははっとその方向を向く。

「何事だ！？」

「先程の天廷空羅と何か関係があるのか...！？」

「にしても、藍染は死んだはずだろう！？生きているはずがない

！

「だが、四十六室は隊長格ですら入れないはずだヨ。それにあの氷の竜は…」
“氷輪丸だ”。

誰もがそう思った瞬間、ふっと目の前に現れたのは、死んだはずの元五番隊隊長、藍染惣右介と、三番隊隊長の市丸ギンだった。

「藍染！？お前、何故…！」

誰もが目にした、あの姿。斬魂刀の一突きで息を引き取ったはずの、藍染惣右介が今、呼吸をして、目の前に居る。

「先程の天廷空羅の事は、本当か」

総隊長が一步前に出て、藍染に問う。すると藍染はニヤリ、と笑い、言った。

「ふふ…貴方たちは本当に愚かだ。私の遺体に、何か変なところは有りませんかでしたか、卯の花隊長？」

藍染の問いに、卯の花はぴくつと反応した。

「ええ、微かに…ですから、貴方が現れたらすぐに向かうつもりでしたが、遅かったようですね」

卯の花はあくまで冷静に答えた。

勇音はごくつと唾を飲み込みながら、じつと藍染を見ていた。

「…日番谷隊長は、何処だ」

浮竹がそう、藍染に問うた。

「そうだ。」

先程、天廷空羅で聞いた声は確かに日番谷冬獅郎の声。

「…日番谷くんかい？あれは驚いたね。あんな姿、初めて見たよ」

藍染は笑いながら言った。

刹那。

ピキピキ…と、地面が凍り始めたのだ。

「何だ！？」

隊長たちは驚いて、宙へと避難した。

「 ああ、まだ生きていたんだね…日番谷くん」
藍染は足元の氷に目をやり、言った。

「 藍染…」

その時、声がした。

それは、間違ひなく日番谷冬獅郎の声だ。
なのに、何処か違う気がした。

ザン、と氷を踏みつけながら現れたのは、紛れもなくあの日番谷だった。

しかしすぐ傍に、氷輪丸とは比べ物にならない程巨大な氷の竜が居た。

「 久しいな藍染惣右介。我の事を覚えているか」

「 …ああ…勿論だよ銀氷。キミには色々、世話になったからね。今はその少年に仕えているのかい」

藍染は氷竜の方を向いて、喋り始めた。

「 ああ。我は今冬獅郎に仕えておる。我が主に刃を向けるのなら、我は汝をも敵とみなす」

「 そうかい。生憎、私はその少年の敵なのでね」

藍染の右手が、斬魂刀の柄へと伸びていった。

「 残念」

氷竜は小さく呟いて、オオオオオ…と唸り始めた。

「 銀氷、お前は…」

「 我は、汝の僕だ。汝は、如何したい？」

銀氷の低い声が、響いた。

「 俺は、藍染を倒す。それだけだ」

日番谷の翡翠の瞳が、ギンッと鋭く光った。

5の夢。第二章

…

我が名は銀氷。

氷輪丸の、もう一つの竜だ。

汝、我と共に歩むか？

…

『 藍染惣右介。我は汝を倒す。それが、我が主の意思だ 』

銀氷は、轟音の如く大きな唸り声に近い声で、そう言った。

「 キミに出来るのかい？私を倒すことが 」

『 汝を倒すことなど、容易いことだ。 冬獅郎、行くぞ 』

日番谷は、まっすぐな瞳を藍染に向け、こくつと頷いた。

「 … 卯の花隊長、四十六室で雛森が負傷しています。直ぐに向か
つてください 」

卯の花は日番谷を見て、頷いた。そして勇音を連れて、瞬歩で消え
た。

「 銀氷、お前は藍染を倒せるのか 」

日番谷は銀氷に視線をやって問うた。

『 汝は、我を信じられぬか？ 』

銀氷の声が響いた。日番谷は首を横に振って、薄く笑みを浮かべた。

「まさか。俺はお前を信じてるぜ」
日番谷はそう言って、斬魂刀を掲げた。それに合わせて、銀氷が才才…と唸り声を上げた。
銀氷は空の彼方へと昇って行く。
そして、日番谷は静かに唱え始めた。

『 我は汝、汝は我。』

自らを剣とする者よ、恐れてはならぬ。
自らを盾とする者よ、恐れてはならぬ。
今この時、我が汝に力を齎もたらそう

氷輪の月、第二章

赤氷せきひ』

刹那、斬魂刀と共に銀氷が赤く光り始めた。

まるでそれは、激しく燃える炎の如く。

6の夢。赤氷

我が名は赤氷。

銀氷に次ぐ、氷輪丸のもう一つの氷竜。

汝は、我に従うか？

「せき、ひょう…」

日番谷は赤い氷竜を目の前にし、小さく呟いた。氷の竜。だが、それはまるで激しく燃えていた。

「…おい、冬獅郎！お前なあ、初めて会った奴に挨拶の一つも無しか、ああ！？」

日番谷は、いきなりの怒声に目を丸くした。銀氷と、まるで性格、口調が違うじゃないか。これで本当に同じ氷輪丸の一匹の竜なのか？

「…日番谷、冬獅郎だ。よろしく」

「OKだコノヤロウ！オレは赤氷！氷輪丸の一つの竜だ！どうだ、赤氷だぜ！？この姿、かっけえだろ！！」

赤氷はさぞ満足そうに唸り、ずいっと体を乗り出した。

日番谷はそれを嫌悪するように、仰け反って一歩下がって距離をとった。

「何だあその態度は！…まあ良い。で、なんだ！？このち

つばけな死神二匹、ぶつ倒せばいいのかあ!?」

赤氷は藍染と市丸の方を向いて、これまた大声で叫んだ。

「…そうだ」

日番谷は赤氷から視線を逸らすようにして答えた。

「…だつたらとつとと殺っちまおうぜえ!!! おつりゃああ

ッ!!!」

刹那、赤氷の口からゴオオツと炎が飛び出してきた。

そして、赤氷から放たれた炎は、出てきた瞬間凍つたのだ。

しかし、その氷の中で炎は燃え続けていた。

「オレの氷炎は最強だぜ!何でも燃え尽くしちまうからな!
!」

赤氷は得意げに笑いながらまた大声で言った。

確かにその威力は抜群だつた。

氷炎はその地面一帯を炎で埋め尽くしてしまったのだ。

しかし、藍染と市丸は無傷だつた。

「ああ!?!てめえ、生意気だな!!!オレの氷炎を受けて無傷
とは!」

赤氷は顔を歪めて、ゴオツと唸つた。

「ああ、駄目だな。全然、効いてないよ。所詮、姿形ばかり
の弱い竜さ」

「んだとてめえ!!!」

赤氷はまた、ゴオオツと唸つた。そして口から虚巨大な氷炎の球を
投げってきた。

しかし、その球が藍染たちに当たる事は無かった。

「 私はそろそろお暇しようか。では、御機嫌よう。 」

最後に見えたのは、藍染の不気味な、余裕を浮かべた笑みだった。

7の夢。氷輪丸に問うても。

“私が天に立つ”。

藍染の望は、一体何だ？

我々に成す術は有るのだろうか。

『チツ。しゃアねえな！！オレに恐れを生して逃げやがったか！じゃあな冬獅郎！！』
赤氷は、そう言ってさっさと斬魂刀へと吸い込まれるように戻っていった。

刹那、日番谷の体はふらつと揺れて、地面へと倒れこんだ。

「日番谷隊長！！」
誰かが自分を呼んでいる。

でも、もう起き上がることはおろか、目を開けることすら出来なかった。。。

…

「隊長！大丈夫ですか?!?!?」
脳みそに甲高い声が響いて、日番谷は微かに目を開けた。
すると、泣きそうな顔をした乱菊が身を乗り出して自分を見つめていた。

…この泣き顔、雛森に似てるな…。

「……っ!!!」
途端、日番谷はぱつと勢いよく身を乗り出した。

「隊長！ダメです、一週間は安静にしてないと、って卯の花隊長が…!」

「雛森は…!」

日番谷は、乱菊の言葉を遮るようにして叫んだ。

乱菊の顔が、一瞬驚きに満ち、そして悲しそうな顔をした。

「雛森は、無事なのか!?」

「……隊長、落ち着いてください。雛森は大丈夫です。今は眠っています…」

乱菊は気まずそうな表情で、日番谷から目を逸らしながら言った。

「そうか。…すまなかった、取り乱して」

「…いえ…」

日番谷はふうつと溜息を吐いて、ベットのの上に寝転がった。

「日番谷隊長、目を覚まされましたか。具合は如何ですか?傷は痛みますか」

「卯の花隊長。いえ、大丈夫です。ありがとうございます」

日番谷は部屋に入ってきた卯の花に小さく礼を言った。

卯の花は優しい笑みを浮かべ、近くの椅子に座った。

「 雛森さんは大丈夫ですよ。だからまずは、ご自分のお怪我を治されてください 」

「 分かってます 」

卯の花は日番谷にそう言っつて、ふうつと溜息を吐いた。

「 今回の事件は、大変でしたね…ああ、そうでした。日番谷隊長、総隊長がお呼びでしたよ。目覚めたらすぐに一番隊舎に来て欲しいと 」

「 え、でも、隊長は… 」

卯の花の言葉に乱菊はぱつと顔を上げる。

しかしそれを日番谷は制して、すくつと立ち上がった。

「 いや、いい。行ってくる 」

「 着物はそちらに 」

「 済まない 」

日番谷は傍にあつた着物を纏い、病室を出ていった。

…

「 総隊長。十番隊隊長、日番谷殿です 」

「 うむ、入れ 」

その言葉と同時に、一番隊舎の門がギギ…と開いた。

「 態々《わざわざ》済まない、怪我の具合はどうかの 」

「 大丈夫です。それより、御用件は 」

「 うむ、そうじゃの。まあとりあえず、お茶にでもしようかの 」

日番谷は茶室へと通され、抹茶と和菓子を出された。

「 結構なお手前で。流石、天才児は何でも出来るのかのう 」

総隊長は日番谷の手前を見て、微かに笑う。

「いえ、祖母が昔やっていたので」

日番谷は抹茶を置き、総隊長に向きなおった。

「で、御用件は」

「うむ、昨日の事じゃがの。お主、あの力は何じゃ」

総隊長の問いに、日番谷は眉を顰めた。

「いえ、それが…俺も良く分かりません。ですが、氷輪丸の中の竜たち、と聞いております」

「氷輪丸の…」

総隊長はそれを聞き、ううむと唸った。

「そうか…わしも氷輪丸の事はよくは知らぬ。日番谷隊長、それはお主が一番知っておるはずなのじゃが、お主も知らぬとなれば…成す術な無しじゃの」

「…そうですね。とりあえず、氷輪丸に聞いてみます。では、失礼します」

「うむ。頼んだぞ」

日番谷は一番隊舎を出て、十番隊へと足を速めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2137h/>

キミは未だ夢の中。

2010年10月15日22時18分発行